

<実践研究>

専科教員による教科書を用いた外国語科の授業作り

—6年生の単元『Welcome to Our School』の実践—

小林哲也

須坂市立小山小学校

酒井英樹

信州大学学術研究院教育学系

キーワード：専科教員，小学校外国語，検定教科書，聞くことの指導

1. はじめに

2017年に告示された小学校学習指導要領が2020年度より全面実施された。小学校における外国語教育に関しては、3学年と4学年の中学年でそれぞれ年間35単位時間の外国語活動が、5学年と6学年の高学年でそれぞれ年間70単位時間の外国語が導入された。高学年の外国語は教科として位置付けられており、各地域で採択された文部科学省検定済み教科用図書（教科書）が用いられた授業作りが始まったと言える。2018年度からは、外国語教育のスムーズな移行と働き方改革を狙いとして、「新学習指導要領の円滑な実施と学校における働き方改革のための指導・運営体制の構築（チームとしての学校運営体制の推進）」による教員加配が行われ、小学校英語に関しては、毎年約2,000人の専科教員が加配されている。この制度を活用した長野県における小学校英語専科教員は、2020年度は、約60名採用されている。このような背景の中で、本稿では、筆頭執筆者である専科教員が須坂市の小学校で実施した6年生の単元『Welcome to Our School』の実践を報告するものである。本実践の特徴として、専科教員による授業作りであることと教科書を用いた授業作りであることが挙げられる。なお、第2著者はメンター（助言者）としてこの実践に関わった。

2. 須坂市の小学校英語教育と専科教員としての筆頭執筆者の背景

本実践が実施された須坂市の小学校英語教育の体制について説明する。須坂市内には11校の小学校がある。2019年度は、専科教員が2名配置されており、児童数が少ない学校には専科が入らず、学級担任が授業を行っていた。新小学校学習指導要領の実施に伴い、2020年度から、市内11校と隣村の小学校1校合わせて12校に対して、専科教員が3名配置された。一人あたり4校ずつ兼務することで、全小学校で専科教員が授業を担当するシステムが整った。本務校では、週に2日勤務し、5・6年生の全ての授業を担当することになっている。一方、残りの3校の勤務校では、週2時間の外国語の授業のうち、1時間を専科教員が担当し、もう1時間を学級担任とALTが行っている。

筆頭執筆者は、須坂市の専科教員3名のうちの1人である。学級担任として小学校を2校経験した後、韓国のソウル日本人学校に赴任した経験があった。中学校教員免許（英語）を

所有していたが、日本人学校赴任までは英語教育には関わらない教員生活を送っていた。ソウルで生活している中で、英語の必要性を強く感じたり、現地の英語教育を目にして刺激を受けたりすることがあった。小学校から日本に比べ総時数 70 時間分も英語の授業を多く取り入れ、英語学習に力を入れている韓国であっても、コミュニケーションツールとしての英語力の育成は課題の一つであった。同じ課題を抱え、転換期を迎える日本の英語教育がどのように変わっていくのかということに興味を持つようになった。そのような折に、帰国するに当たって英語専科教員の話があり、英語指導の経験はなかったが須坂市に専科教員として着任することになった。2020 年度は、小山小学校を本務校として、須坂小学校、日滝小学校、旭ヶ丘小学校に勤務している。

3. 須坂市で用いられている教科用図書

小学校英語の教科書は 7 社から出されているが、須坂市では *Crown Jr.* (三省堂) が使用されている。*Crown Jr.* の特徴を編修趣意書 (<https://tb.sanseido-publ.co.jp/02cjpr/>) に基づいて説明する。*Crown Jr.* の特徴の一つとして、1 年間の学習を 3 つのユニットに分けている点が挙げられる。1 つのユニットは、さらに HOP (学びの見通しを立てる)、STEP (語彙や表現を増やす)、JUMP (実際の場面で表現する) という 3 つの段階から構成されている。HOP (Get Ready) は、既習の知識や技能を総動員しながら言語活動を行い、今までの学びを振り返ると同時に、当該ユニットでどのようなことができるようになるのかを理解し、JUMP (Presentation) でどのようなことが伝えられるようになりたいのかという学習の見通しを立てる活動を行う。STEP (Lesson) は、複数の Lesson から成り、場面を通して、語句や表現を学び、聞いたり読んだり、話したり書いたりすることができるような学習活動 (言語材料の習熟を目指した活動) 及び言語活動 (英語を用いて情報等の授受を行う活動) が設定されている。JUMP (Presentation) では、大きな 2 つの発表活動を行うようになっている。

Crown Jr. では、インプットからアウトプットへという学びの過程を大切にしている。すなわち、場面の中で用いられる英語を推測しながら聞いたり、ある語句や表現に焦点化した英語を聞いたりすることで語句や表現に関する児童の気づきを促し、徐々にアウトプット (話すことや書くことの活動) につなげるように設定されている。各 Lesson は、PANORAMA という活動から始まる。絵図を見ながら比較的長い英語を聞く活動である。既習の表現だけでなく、当該 Lesson で学ぶ表現も含まれ、絵図などから推測しながら意味内容を理解することが求められる。当該の Lesson 中 (約 3 週間、6 回の授業)、繰り返し同じ活動が行われる。当該 Lesson の 3 つの Part で順次表現を学び習熟するにつれて、聞いて意味内容が理解できる量が増えるようになっている。PANORAMA の図の一つに焦点をあてて、Lesson で導入する表現に焦点をあてるのが Listen & Talk の活動である。聞いたことを参考にして、徐々に児童が表現を用いる活動となっている。Lesson の終末では、Enjoy Listening (学んだ表現を複数使った英語を聞く活動) と、Talk to Friends (学んだ表現を複数使って英語を話す活動) が設定されており、段々と話す英語の量が増えるようになっている。

専科教員による教科書を用いた外国語科の授業作り

その他、Story (イラストを手がかりにしながら、まとまりのある英語で語られる物語を聞く活動) や、Enjoy Reading (音声で十分慣れ親しんだ英語を読む活動) などが設定されている。

Crown Jr. では、目的意識をもって学んだり、目的に応じて工夫をしたり、振り返って次の言語活動につながる課題意識を持つことが重視されている。例えば、JUMP (Presentation) では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等が明確にされた発表活動が設定されている。2つの活動が設定されているのは、1回目の活動を振り返り、よかったことや課題であった点を、2回目の活動でさらに改善したり、課題を克服したりすることができるようにするためである。

なお、第2執筆者の酒井は、*Crown Jr.* (三省堂) の著作者の一人である (<https://tb.sanseido-publ.co.jp/02cjpr/edit/>)。

4. 専科教員としての問い

筆頭執筆者は、年度当初に、専科教員として表1に示すような不安や疑問を感じていた。この不安や疑問を解消するべく、第2執筆者がメンターとして関わるようになった。不安や疑問は、主として次の5点にまとめられる(表1参照)。

表1. 専科教員として勤務を始めた際の不安や疑問

| 番号 | 観点 | 不安や疑問 |
|----|-----------------|--|
| 1 | 教科書の作り | ・他の教科とは違い、1時間の中にさまざまな活動が組み込まれているつくりの教科書を用いて、どのように授業を行っていけばよいか。 |
| 2 | 英語の聞かせ方 | ・長い英語をどのように聞かせたらよいか。 ・ <i>Crown Jr.</i> には、PANORAMA や Story といった、比較的長い英語を聞かせる活動がある。話の大体の意味をつかむことを目的としたこれらの活動をどのように行うのか。 |
| 3 | 教師の英語使用 | ・児童たちに対してどのように英語を使ったらよいか。 ・自分はどの程度英語を使ったらよいか。 ・あるトピックについて教師と児童がやり取りを行う Small Talk をどのように組み合わせたらよいか。 |
| 4 | 児童理解や学級担任とのかかわり | ・勤務する4校の児童たちは、どの程度親しんできているのか。 ・指導することになる児童数は400人を超えるが、この条件下で、児童理解や児童に適した教材の準備はどうしたらよいか。 ・学級担任の先生との引継ぎをどのようにするのか。 |
| 5 | COVID-19の対応 | ・COVID-19の影響がありグループワークやペア活動、教室内を歩き回り自由に交流するような活動を行いづらい中で、どう活動を仕組んでいけばよいかということには最大の悩みを感じていた。 |

このような不安や疑問について第2執筆者と話をする機会を設けたのが2020年6月であった。第2執筆者が行った主な助言内容は次の通りである。

教科書の作りについては、活動の目的を理解し軽重をつけていくことと、計画されている活動のうちメインとなる言語活動を教師が位置付けることが重要であることを確認した。メインとなる言語活動を授業の展開の核にして、「本時のねらい」を立てると授業構想しやすく、児童にとってもメリハリのある授業になることに言及した。

英語の聞かせ方については、途中で音声を止めて教師が英語を繰り返したり、イラストを指さしたり、ジェスチャーを付けたりしながら、意味を理解させる方法を確認した。小学校学習指導要領によれば、聞くことの目標において「ゆっくりはっきりと話されれば」という条件がつけられている。スピードを変えられない場合には、音声を止めてポーズを置き、考える時間を生み出したり、教師が繰り返すことで何回か英語を聞く機会が与えられたりすることで代替することができることを示した。

教師の英語使用に関しては、できるだけ英語を用いて語ることが重要であることを確認した。第二言語習得理論では、英語を聞いて意味内容を理解する機会を多く設けることが第二言語を習得する上では重要である。また、英語を聞くという言語活動を多く経験することで、言語を処理し、聴解力を高めることができる。そのため、できるだけ英語を用いる方がよいことを確認した。

筆頭執筆者の授業ビデオを見たところ、**Small Talk**（あるトピックについて教師と児童がやり取りする「話すこと [やり取り]」の言語活動）は、投げ込みの活動のように行われていたため、教科書を用いた授業時間が短くなるという課題が見られた。そこで、教科書の活動（PANORAMA や Chant など）と関連付けて、**Small Talk** を行うことができることを示した。例えば、peach/pineapple/pie という語をリズムに乗せて練習した活動（Chant）の後、**I like peaches, but I don't like pineapples very much. Peaches are sweet. And I like sweet fruits. Pineapples are not sweet. How about you? Do you like peaches?** のように児童とやり取りをするのである。

多数の児童を教えることについては、学級担任との情報交換が重要であることを確認した。また、授業についての学級担任との連携については、実践を進める際にはできるだけ教科書や指導書で提案されている授業展開を基本とすることが重要であることを確認した。これは、須坂市の状況（専科教員の本務校以外の学校では、学級担任と専科教員が交互に授業を持つ）を考えると、教科書や指導書の指導案が拠り所となるからである。教科書や指導書の指導案をベースに本時の流れを組み立て、専科教員と学級担任と一緒に展開を確認して共通理解のもとに指導を行うことで、双方の授業のギャップを少なくすることができる。

コロナ禍の対応については、大人数のグループワークや教室を自由に歩き回るような活動を避けつつ、須坂市の専科教員同士で情報交換するとよいことを確認した。

5. 実践報告

5.1 参加者・実践時期・教科書

専科教員による教科書を用いた外国語科の授業作り

本実践報告の対象クラスは、筆頭執筆者が全ての授業に関わっている本務校（須坂市立小山小学校）の6年生の2クラスである（計60人）。実践時期は2020年5月末から8月上旬までであった。使用教材はUnit 1のWelcome to Our School（*Crown Jr. 6*、三省堂）であった。

5.2 単元計画

Unit 1の内容に即して、本ユニットのゴールを『小山小学校の行事を紹介しよう』と決めた。教科書や指導書の単元展開を基にしながら21時間の授業展開を考えた。教科書使用の初年度であったため、指導書の単元計画をできるだけ忠実に実践をすることにした。

主な内容は次のとおりである。HOP (Get Ready) では、自分の学校を紹介するにあたり、誰にどんなことを伝えるのかということを経験者のモデル動画を基に考えさせた。STEP (Lesson) はLesson 1とLesson 2に分かれており、JUMP (Presentation) の発表で使える表現をインプット（聞くことの活動）からアウトプット（話すことの活動）につなげられるように様々な活動で繰り返し学ぶようにした。JUMP (Presentation) では、既習表現を復習しつつ、伝える内容を考え、発表に必要な物を作ったり練習したりしながら発表する計画にした。

1時間の授業の流れも指導書で示されている展開を参考にした。*Crown Jr.*の授業プランは、分単位で行う活動が綿密に計画されている。1時間に行う活動の数が多く、どこに焦点をあてて授業作りを行えばよいか分からないちぐはぐな授業になってしまいがちであった。そこで、指導案の中でメインとなる活動を決めることにした。その活動に応じて、本時の「めあて」を立てるようにした。そうすることで、授業のポイントが明確になり、軽重を意識しながら授業作りができるようになった。

5.3 本単元の実践にあたり工夫したこと

本単元の実践にあたっては、6月に実施した筆頭執筆者と第2執筆者との話し合い（4節参照）に基づき、次の工夫をすることにした。

(1) Activity の工夫

第1に、活動の工夫を行った。英語で話す必要感を大切にしながら子どもの興味・関心にあった活動を取り入れるようにした。これは、教科書の特徴として、一般的な話題が扱われることが多く、児童の実態に応じて修正する必要があるからである。

例えば、教科書には、絵図を見ながら、何月にどの行事があるのか伝え合うような活動が記載されている。実際に筆頭執筆者が行った活動では、ALTに日本の行事を紹介するという目的を持って、We have ... in (月名) . という表現を使って伝え合わせるようにした。このように児童にとって身近なALTを伝える相手に設定することにより、相手意識を明確にして行事を伝えられるようにした。

(2) Small Talk の工夫

次はSmall Talkの実施方法について工夫を行った。教科書や指導書の展開とは別に、Small Talkを独立して行っていたため、ただでさえ活動が多いプランにさらに新しい活動が

加わる形になってしまい、授業作りが難しくなっていた。第2執筆者とのやり取りの際（4節参照）、教科書の活動と関連付けて Small Talk を行うことについて検討した。その結果、独立して行うのではなく Chant（英語の音に焦点化して単語を練習したり、語彙を増やしたりするために、リズムに合わせて単語を発音する活動）や PANORAMA などの活動の中で児童に問いかけながら児童とのやり取りの時間を大切にするようにした。その結果、自然な流れの中で、児童たちとやり取りをする時間を増やすようにした。

(3) 長い話の聞かせ方

長い英語の聞かせ方を工夫した。具体的には、PANORAMA のように長い話を聞かせる際には、ただ聞かせるだけではなく、途中で音声を止めて内容を確認したり、児童とのやり取りを通して理解度を確認したりしながら活動を行うようにした。

(4) ALT との交流

最後の工夫は、ALT に協力してもらい、英語がコミュニケーションのツールであることを意識させたり、相手意識の大切さを実感させたりしたことである。小山小学校での取り組みについて ALT の親族に話したところ、日本の学校行事に大変興味を持ってくれた。そこで、グループごとに撮影した学校行事の紹介ビデオを送信することにした。すると、返事のビデオレターが届いた。児童と共有したところ、「自分の話した英語が伝わって嬉しかった」、「アメリカの行事が知れて良かった」、「言っている英語が少し分かった」、「早くて分からなかったから、もっと分かるようになりたい」、「もっと英語を話せるようになりたい」といった感想が見られ、英語学習へのさらなる意欲の高まりが見られた。

5.4 分析方法

本実践の取り組みのうち、特に「長い英語の聞かせ方の工夫」の成果を検証するために、毎時間の振り返りカードの記述と JUMP (Presentation) における発表のビデオ記録を分析した。振り返りは、①分かったこと・出来たこと、②気がついたこと、③次に向けて（知りたい・出来るようになりたいこと）以下の点に関して記述するよう指示を出している。振り返りカードの記述については、前節で述べたように長い英語を聞かせるところでの工夫を行ったため、PANORAMA に関する記述に焦点をあてた。STEP の各 Lesson の PANORAMA は、絵に関する英語を3週間にわたって6回の授業で聞くことになる。そこで、Lesson 1 の1回目と6回目の授業の振り返りを比較することで、長い英語の聞き取りに対する意識の変容がわかると考えた。さらに、Lesson 2 の1回目の PANORAMA を行った授業の振り返りも合わせて分析した。

JUMP (Presentation) における発表のビデオ記録については、どのような発表であったのかという点から分析した。JUMP (Presentation) では、グループ毎に紹介する学校行事を決めた。発表でどんなことを伝えるかについてのメモを作り、メモを基にして写真や絵などを用いてプレゼンテーションを行った。ユニットの最初の HOP (Get Ready) の時点で、発表する対象として家族、他校の児童、親戚や外国の人などが挙げられていたので、これらの人に

小山小学校の行事を紹介することとした。ビデオ記録を基に、インプットからアウトプットへつなげられているかを分析しようとした。

6. 分析結果

6.1 振り返りの分析

表2は、振り返りをまとめたものである。2クラスの児童の振り返りから、PANORAMAに関する記述を整理したところ、Lesson1の最初の授業では、58人中11人の記述が見られた。その半数が、「もっと分かるようになりたい」(4人)や「分からなかった」(3人)と書いていた。肯定的な振り返りは2人だけであった。Lesson1の6回目の授業(PANORAMAの活動を行う最後の授業)では、60人中28人が、「ほぼ分かった」(14人)や「聞こえる言葉が増えた」(11人)など、理解できる内容が増えたという記述を行っていた。また、新たなLessonのPANORAMAの聞き取りに対してどのような意識を持っていたかを探るために、Lesson2の最初の振り返りを分析した結果、60人中21人がPANORAMAに関して記述していた。Lesson1の1回目と同様に分からないと記述した児童も2人見られたが、Lesson1の1回目より聞けるようになっていて嬉しいと記述している児童が10人もいた。

表2. 振り返りにおけるPANORAMAに関する記述

| 授業時数 | 内容 | 人数 |
|----------|---|-----|
| Lesson 1 | | |
| 1回目の授業 | 58人中11人がPANORAMAについて言及 | |
| | ・もっと分かるようになりたい | 4人 |
| | ・あんまり言っていることが分からなかった | 3人 |
| | ・少し分かってうれしい | 2人 |
| | ・知らない単語が沢山出てきて分からない | 1人 |
| | ・少し分かった言葉がある→どんな内容か分からない | 1人 |
| 6回目の授業 | 60人中28人がPANORAMAについて言及 | |
| | ・ほぼ分かった | 14人 |
| | ・聞こえる言葉が増えた | 11人 |
| | ・ずっと分からなかった言葉が分かった | 3人 |
| Lesson 2 | | |
| 1回目の授業 | 60人中21人がPANORAMAについて言及 | |
| | ・前回のパノラマの1回目より聞いて驚いた(嬉しかった) | 10人 |
| | ・止めながら聞いたら分かりやすかった | 4人 |
| | ・単語をつなげながら考えると話の内容が分かる | 3人 |
| | ・sportsやfood(sportsやfoodなど聞こえた単語を書き出している) | 2人 |
| | ・あまり分からなかった | 2人 |

次に一人の児童（Aさん）に焦点をあてて、振り返りがどのように変容していったかを分析した。表3は、Aさんの記述を示したものである。Aさんは、1回目の授業では英語で話されていることがあまり理解できなかったことを記述した。2回目以降は、長い英語を途中で止めたり、英語でのやり取りを通して確認したりしながら長い英語を聞いたことにより、分かったことが具体的に書かれていた。6回目には、イラストをタッチしながら音声を聞いて話の内容をつかめたことが記述されている。Lesson 2の1回目の振り返りでは、「レッスン1の1回目より理解できる言葉が増えた」という記述があることから、Lesson 1を通して英語の音声に慣れ、知っている単語を手がかりにしながら英語の話を聞くことができたことがわかる。また、途中で止めたり内容に関してやり取りをしたりすることで、内容理解を深めることができると考えられる。

表3. Aさんの振り返りの記述

| 授業時数 | Aさんの記述 |
|--------------------|--|
| Lesson 1 1回目の授業 | <u>1回目は、あんまり言っていることが分からなかったけど、確認しながら2、3回聞いたら少しずつ分かるようになった。先生とみんなで聞いている時に、簡単な英語を聞いてそれがだんだんとつながっていたことが分かった。次は、今日みたいに少しずつ聞いて行きたいと思った。</u> |
| 2回目の授業 | 分かったことは、ガリバーの話で風の単語が聞けた。 <u>ターニャの出身はインドだと分かった。</u> 次は、もっと単語を聞きたい。 |
| 3回目の授業 | 私は、消しゴムを持っているよとか少し言えるようになった。持っている時は、「ハブ」ということが分かった。 <u>ニックは、ねこを二匹とイグアナを飼っていることが分かったし、ゆみは何も飼っていないことが聞けた。</u> 次は、これを持っているよと言えるようになりたい。 |
| 4回目の授業 | 今日は、友だちに何が好きと聞けたし、前よりも少し文章が読めるようになった。二人ともそろった時に、「ウィ」ということが分かった。 |
| 5回目の授業 | 5年生の時に、何が出来るか質問したときより、ちゃんと分かりやすく聞けた。 <u>ゆみの兄弟はからい物が食べられることが分かった。</u> ゲームのやり方もみんなのやり方を見てだんだんと理解できた。次は、何かを聞くときに、指を指しながら聞きたいと思った。 |
| 6回目の授業 | 音声を聞いて、投げるとか取るという英語が分かった。 <u>パーベキューのを聞くときに、指で追いつながら出来たし、最初より言っていることが分かった。</u> 次は、聞いたことを言えるようになりたい。 |
| Lesson 2 1回目の授業 | 新しい音声を聞いたけど、前のパーベキューのやつより聞けた。指を指しながら追っていったけど、まだ分からないところもあったから、次は、聞けなかった所をしっかりと聞きたい <u>と思った。</u> クイズはもっと予定表を見ようと思った。 |

注. 下線部は PANORAMA に関する記述を示している。

本節では、PANORAMA に関する振り返りの記述を整理して分析した。これらの結果から、長い英語を聞かせる際の工夫を行ったことは効果的であったと考えられる。また、回数を重ねるにつれて、英語を聞かせる際の筆頭執筆者による工夫の仕方が向上した可能性もある。

6.2 ビデオの分析

次に、JUMP における発表のビデオを分析した。図 1 に示すのは、Unit 1 の冒頭の HOP で、ある児童が書いたものである。この児童は、「どの行事について伝える?」の項目には、「音楽会について (concert)」

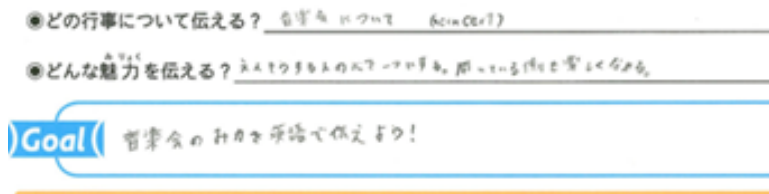


図 1. HOP で書いた Goal

「どんな魅力を伝える?」の項目には、「えんそうする人の心をつなげる。聞いている際にも楽しくなれる。」と書いている。また、Goal として、「音楽のみ力を伝えよう!」としている。

また、この児童は、図 2 に示すようにプレゼンテーションに向けて発表 MEMO を作った。

『10 月にある』や、『とても楽しい』など習った表現を使って伝えられる内容もあれば、劇をやるクラスがある、各クラスで合奏や合唱を発表するなど、既習の語句や表現で表すのが難しい内容もあった。児童たちはどのように英語にしたらいかということ、英語にできたとしても他の児童に伝わるかということに関して悩みながら、最終的には次のような発表になった (以下は、ビデオ記録を書き起こしたものである)。



図 2. JUMP における発表 MEMO

Hello. Welcome to Koyama elementary school. We have a school concert in October. Play concert or chorus. We play many songs. We can do drama. It is very fun.

We have ... や It is very fun といった、それぞれの Lesson を通して学んだ表現を用いながら、どうしても伝えたい内容を発表している。グループの一人は、歌を歌ったり合奏したりするというのを play music, chorus という言葉を使って表現しようとしたが、慣れない語

句や表現を使用することで自信なさげになってしまい、間違えてしまった。

この様子から、児童にとって表現したいと思うような語句や表現は、教師が用いたり、導入したりしながらインプットし、すぐには使えるようにならないことを理解した上で繰り返し使う機会を作り、自信をもってアウトプットできるように学習活動を仕組んでいく必要があることを感じた。すなわち、*Crown Jr.* はインプットからアウトプットに段階的につなげる展開となっているが、**JUMP (Presentation)** において児童が表現したい気持ちを大切にしたい授業を行うためには、児童が伝えたい内容を予想しながら、早い段階から教科書の語句や表現に加えてインプットしていく必要があることが示唆される。

6.3 結果のまとめ

振り返りや授業ビデオの分析から、以下の4点が分かった。

1. 英語を止めたり、やり取りしながら音声を聞いたりしていくことで、長い英語の聞き取りでも内容理解を深めることができる。
2. 英語の音声に慣れることで、知っている単語を手がかりにしながら大まかな内容を捉えることができるようになる。
3. 伝えたい内容をどのように英語で表現すれば良いのかという難しさを児童は感じている。
4. 児童が伝えたい内容を予想しながら、早い段階でインプットしていく必要がある。自分で実際に使えるようになるまでに時間がかかることを理解した上で、繰り返し使う機会を設けていくことが重要である。

7. 実践の取り組みのその後

6年生の1学期に行った単元『Welcome to Our School』の実践を通して、筆頭執筆者が年度当初に感じていた不安や疑問(表1参照)に関して、どのように考え、感じるようになったかについて表4にまとめる。

また、1学期の実践を通して、筆頭執筆者には新たな疑問が生じた。1つ目の疑問は、児童の誤りの訂正についてである。児童が英語を用いる際に、多くの誤りが見られた。どのように対応するかが疑問に感じた。2つ目は、**JUMP (Presentation)** での発表の際に自分の伝えたいことを新しい知識(未習の語句や表現)を得ながら伝えてもよいのか、あるいは自分が知っている語句や表現だけを利用して伝えたい内容を伝えた方がよいのかということである。

そこで、2020年8月に、筆頭執筆者と第2執筆者が話し合う機会を設けた。その中で、誤りには、学習者が一貫しておかす誤り(errors)と、その場の言語使用の状況により生じてしまう間違い(mistakes)があり、学習者の誤りがどちらなのか考えた上で指導にあたる必要があることを確認した。また、**JUMP (Presentation)** に関わる表現に関しては、児童にとって必要な表現はあらかじめインプットしていくことが大切であることを確認した。

専科教員による教科書を用いた外国語科の授業作り

表 4. 単元の実践を通して考えるようになったこと

| 番号 | 観点 | 不安や疑問 |
|----|-----------------|--|
| 1 | 教科書の作り | ・教科書に関しては、慣れというものもあるが、子どもたちから「開けるようになってきた」や、「使えるようになってきた」という声を聞くことができ、自分自身の3歳の子どもの母語の習得に似ており、教科書は母語習得に近い作りになっているのだと感じた。 |
| 2 | 英語の聞き方 | 分の中でも進め方に関して手ごたえを感じることができるようになってきた。インプットを多く行い、その中で気付かせる機会をたくさん作るということは、自分自身の3歳の子どもの母語の習得に似ており、教科書は母語習得に近い作りになっているのだと感じた。 |
| 3 | 教師の英語使用 | ・Small Talk は、単発で扱うとちくはぐになってしまうが、授業の中で出てくる内容や Chant と関連づけたりしながら実施するようになったことで、児童とのコミュニケーションの時間をより大切にできるようになった。 ・英語を使うことによって、自分が間違ったり、子どもたちに伝わらなかったりしたらどうしようと思っていたが、現在はたくさん英語を使う中で、理解できたり、分かったと思ったりしてもらえるように、ジェスチャーを用いたり、ALT に頼ったりしながら極力英語で伝えるようにしている。 |
| 4 | 児童理解や学級担任とのかかわり | ・児童の英語の親しみに関しては、自分が教科書や児童に慣れたことや、児童も慣れてきたこともあり、児童に応じて活動を工夫することができるようになり不安ではなくなってきた。 ・専科教員としての児童理解に関しては、授業外にも関わったり、積極的に話しかけたりしながら、顔と名前を覚えていくようにした。教材は、どこの学校でも使えるようにベーシックを作っておいて、あとは各学校に応じて多少変えて使っていくようにしている。学級担任の先生とは、勤務日に指導略案を基に授業の打ち合わせをしている。どうしてもプラン通りにいかないことやズレも多いが、連絡を密に取りながら協力して指導にあたっている。 |
| 5 | COVID-19 の対応 | ・コロナ禍において、言語活動がメインの外国語でどのように活動を仕組んでいくかは、今も解決していないので難しい。教室の中を歩きまわるような活動は避け、隣同士で組ませる活動をメインにし、時折4人程度のグループ活動も行っている。 |

このように、筆頭執筆者と第2執筆者の間でやり取りをしながら、「実践 → 疑問や不安 → 第2執筆者とのやり取り → 実践 (→ 疑問や不安)」の流れで、実践を進めている。

8. おわりに

本実践報告を執筆している現在(2020年11月)、筆頭執筆者が感じている疑問は、評価と中学校との連携に関するものである。評価に関しては、どこの学校でも指導要録と同じ3観点(「知識・技能」,「思考・判断・表現」,「主体的に学習に取り組む態度」)で通知表をつ

けている。期間が短かったこともあり、1学期は、毎時間の振り返りや小テスト、アクティビティの様子をもとに、「知識・技能」の面と「主体的に取り組む態度」の2点の評価を実施した。2学期は「思考・判断・表現」も含めた評価をするため、どのように評価していくかということが大きな課題である。中学校との連携に関しては、2021年度新しい教科書に変わる中学校に対して、先生方にどのような情報を引き継いでいくかということが課題に感じている。これらの課題についても、実践及び筆頭執筆者と第2執筆者のやり取りを通して、追究していきたい。

注

本稿は、第20回 小学校英語教育学会 中部・岐阜大会（2020年10月11日）で行った実践報告「6年生の単元『Welcome to Our School』の実践報告—専科教員による教科書を用いた授業作り—」（発表者：小林哲也・酒井英樹）の内容を加筆修正したものである。

(2020年11月27日 受付)

(2021年 3月 4日 受理)